

# 予備校・英語塾から見た 語彙習得の課題

Language School ～航～ 代表／元四谷学院講師 中山 航



## はじめに

高校生は、単語帳を使って英単語を「習得」してから長文に取り組むことが多い。最近では、中学生でも単語帳を使うようだ。だが、これは「正しい」学習法なのだろうか？ 本来は、英語で書かれた多くのtextsに触れて、生きた英文から必要な語彙を得るのが言語の自然な習得だと思われる。母語の習得過程と比較すれば明らかだろう。

しかし現実には、高校生が触れるtextsの量は、センター試験をはじめ大学入試に必要な語彙を形成するには少なすぎる。また、始めのうちは、文の最小単位と言える単語を知らなければ英文を読むことができないことも事実である。したがって、受験生が英単語帳を使う意義を考えることも必要だろう。

## 単語帳の使用法と留意点


中高校生の多くは、自身の知的レベルよりも低い英文を読んだり聞いたりすることから始める。本格的に英語を勉強し始めるのが中学生以降であることから仕方がないことではあるが、日本語を通して得るものと習い始めの英語を通して得るものに大きな差があるのが現実である。しかし、特に難関大学の入試では、欧米の知識人向けに書かれた、高度な、時に生徒自身の知的レベルより高い文章が出題されるため、受験生は、現代文の学習と比べて、きわめて短期間でまず自分の知的レベルに見合うまで語彙力を引き上げなければならない。そこで、短期間で効率良くキャッチアップを行う手段として単語帳を使用することを考えることになる。単語帳を使用すると効果的であると思われる場面を、以下に挙げておく。

①受験勉強のスタートダッシュ——入試で出題される英語の長文を読み始めるうででストレスを感じすぎないために単語帳を使う。一文中に5つも6つも知らない単語があつては、英文を読む気にもならないだろう。そのために受験勉強の初期段階に集中的に語彙を増やすことは有益である。語彙習得の効果をわかりやすく実感させて、生徒の意欲を高めるためには、あまり難しいものではなく、センター試験レベルの頻出語彙の習得を目的とする単語帳から始めるとよいだろう。

なお、英文法の学習を徹底すれば英文を読めるようになると信じて、英文法の問題集、参考書のみを繰り返すのは危険である。なぜなら、初学者用の英文法の問題集で扱われる英単語は会話調のものが多く、大学入試長文に出てくる重要な英単語はあまり出てこないからである。

②(相対的な)到達目標を知る——同レベルの単語帳であれば、収録語彙に大差はない。方法論の違いだけである。だとすれば、1冊仕上げれば他の受験生に対するハンデがなくなる可能性が高く、習得語彙の偏りもなくなる。読んだ長文に出てくる単語を覚えるだけでは必要十分な英単語を得られないのではないかという生徒の不安感を消すためには有効な手段だろう。

③習得した英単語をチェックする——この単語帳の使い方こそ一番推奨すべき方法だと思われる。中級程度(英検準2級～2級程度)の英単語をものにしたと思ったら、サプリーダーなどを活用してさらに多くの英文を読み、その後自分が触れて辞書を引いた英単語がどれだけ単語帳に載っているか確認していくと効果的である。知らない英単語ばかり載っている単語帳で無理やり全部憶えろといっても無理がある。単語テストを行ってもあまり成果がでないのは、生徒がshort-term



memory（短期記憶）を使って無理やりテスト前に頭に詰めこみ、テストが終わったらすぐ忘れてしまうからである。したがって、上級の語彙に関しては一気に覚えさせようとするのではなく、リーディング（望ましくはリスニングを）教材と併用する形を検討するとよいだろう。

単語帳の使用に関しては留意点もある。多くの生徒は、英単語を見て対応する日本語が出てくれば、英単語を「習得」したと誤解している。しかし、そのような学習法で単語帳を「仕上げた」からといっても、真に英語を読んだり聞いたりする自信がつかわけではない。例えば、私が予備校で教えていたとき、その予備校が認定する最上位の語彙力を得たはずの生徒こそがかえって長文を読む不安を抱えていた。その背景には、各単語が持つ知的文脈を無視して、機械的な暗記作業のみを行っていることがある。単語帳を使うと短期間で学習が進み、確かに達成感が得られやすい。しかし、相手の伝えたいことを理解するため、自分の理解してほしいことを伝えるために、語彙力を増やしているということを忘れてしまっては、英単語を憶えたつもりなのに、理解できない、伝えられないという不安ばかりが増してしまう。

私立難関大学向けの予備校の授業で産業革命の経緯と背景を説明していたとき、ある生徒が「なぜそんな無駄なことを説明するのか」と質問してきて愕然としたことがある。生徒にしてみれば、単語と構文を押さえて和訳をし、設問の解答を早く知ることができれば勉強は終わり、という意識なのだろう。しかしそれでは、上位の大学で出題される英文を理解することなどとても望めないし、英語を学ぶ意義も薄れてしまう。語彙学習の最初の段階で、単語と和訳の対応を覚えるのは序章に過ぎず、単語が用いられる文脈背景の理解が不可欠である。こうすることで英単語の理解を深め、記憶として定着できるからである。

市販されている単語帳には、以下のようにさまざまな覚え方を提唱するものがある。

- ① 1単語と日本語訳のみを覚える
- ② 1単語につき1フレーズで覚える
- ③ 1単語につき1例文で覚える
- ④ 1例文につき複数の英単語を覚える

それぞれ一長一短であり、好みとレベルに応じたものを用いればよいだろう。しかし、日本語に比べて、単語の多義性が高いと言われる英語の学習では、⑤長文の中から重要単語を覚えるプロセスが欠かせない。文と文のつながり、パラグラフとパラグラフのつながり、論理関係等が分からないことには、真の意味での語彙の習得は不可能ということをお忘れなくしたい。

## long-term memory（長期記憶）化を図る

単語帳を生徒に持たせる主な理由は、生徒に英単語を定着させることであるだろう。しかしパッと憶えてパッと忘れられてしまっただけでは目的を達成することはできない。かえって生徒に無駄な時間を過ごさせ、英語嫌いの大きな要因になってしまう。だとすればどのように英単語を定着させるかを考えるべきだ。

short-term memoryからlong-term memoryにするためには、繰り返しが必要だ。しかも、ただ繰り返すのではなく工夫が必要だ。

### ①感情・気持ちをこめる

“I’m satisfied with the result.”という例文を暗い雰囲気でも、“The news made me sad.”という例文を感情をこめずに言っても、なかなか身に付かない。意味を実感せずにおうむ返しで暗唱しようとしても、字面の上滑りになってしまう。経験上、発音、アクセント、イントネーションも含めて指導し、生徒にrealityを感じさせた方が定着が良いようだ。

### ②多角的な記憶・理解を推進する

大学入試では、暗記した情報や知識だけでは対応できず、ましてや英単語を日本語に一対一対応で置き換えるだけではまるで歯が立たない。最初は一対一対応の暗記で精一杯かもしれないが、私の塾では、基礎的な語彙力が確立して行く段階で、以下の学習方法を順次導入している。

#### 1) 類義語、対義語をとともに押さえる

・類義語：英語では、パラフレーズ、言い換えが非常に多く、入試でも頻繁に出題される。

・対義語：英語の基本であるLogic(symmetry: 左右対称にとらえる)を理解する意識が生まれる。

#### 2) 英英辞典あるいは英英の説明のある単語帳を使う

- ・英語を英語で理解するきっかけとなる。
- ・パラグラフ・リーディングにおいて、Supporting sentencesを読んで筆者の主張を理解する疑似体験になる。

### 3) ラテン語由来の英単語を派生語を含めて学習していく

ラテン語由来の英単語について、次に詳しく説明してみたい。

### 接頭辞 (prefix)、語根 (word root)、接尾辞 (suffix) を使って理解する

大学入試では、レベルが上がれば上がるほど、アカデミックな英文が増え、使われる単語もラテン語系のものが多くなる。こうしたラテン語系の英単語は、接頭辞、語根、接尾辞という構成が分かれば、語彙を理解しやすいばかりか、類義語や対義語、派生語も関連付けて獲得し、長期記憶化することが期待できるから、一気に語彙力を高めることが可能である。これらの情報は近年の単語帳には記されていないことも多く、授業中に適宜補足して注意を喚起する必要がある。

接頭辞等の導入についても、1つの意味を教えるだけで済ますのではなく、生徒の定着度を見ながら、少しずつ多角的に行うことが望ましい。

接頭辞“dis”を例にとってみよう。

**接頭辞“dis” (分離、分散、否定) を含む単語例**

☆“disadvantage”「不利(な立場、状態、条件)」  
= “dis” (否定) + “advantage” (有利、強み)

☆“disagree”「意見が合わない、反対する」  
= “dis” (否定) + “agree” (賛成する、同意する)

☆“disappear”「消える、消滅する」  
= “dis” (否定) + “appear” (見えてくる)

こうしてみると“dis”はただ単に「否定」と覚えておけばよいと言われそう(英単語帳にも「否定」のみが載っているものがある)だが、できればタイミングを見はからって、①「分離」の意味も押さえた方がよい例と、②「分離」の意味で押さえないといけない例を導入していきたい。

#### ①「分離」の意味で押さえた方がよい例

☆“disclose”「～を暴く、暴露する」

“close” (閉じているもの) をただ単に「否定」する (開ける) より、「バラバラにする」とした方が、「暴露する」感じがしないだろうか。

☆“discover”「～を発見する」

“cover” (覆われているもの) をただ単に「否定」する (開ける) より、「バラバラにする」とした方が、「発見する」感じがしないだろうか。

#### ②「分離」の意味で押さえないといけない例

☆“distribute”「分配する、割り当てる」

“dis” (バラバラに) “tribute” (贈る)

※「与えない、贈らない」ではない。

☆“disperse”「四方にまき散らす」

“dis” (バラバラ) に “perse” (まき散らす)

※「まき散らさない」ではない。

接頭辞、語根、接尾辞を使って英単語を学ぶことで、長期記憶化し、忘れづらくなるが、接頭辞 dis- を単純に「否定」とだけ教えて生徒への説明を簡略化してしまうような方法では、後に矛盾や誤解を生む可能性がある。これは、教師が思っている以上に深刻な影響を与えることがある。

次に、誤解が生まれるメカニズムとその解決方法について、若干の説明を試みたい。

### 英単語を憶える上で邪魔する記憶のメカニズムと解決策

英単語を憶えようとする時に起こる問題は、ただ頭に入ってこないというだけではなく、①前に憶えたことが邪魔をして新しいことが憶えられない、あるいは②新しく憶えたことが前に憶えたことを忘れさせたり、そこまでいなくても混乱するという現象も見られる場合がある。

①のような状態を逆行抑制 [干渉] (retroactive inhibition [interference])、②のような状態を順向抑制 [干渉] (proactive inhibition [interference]) という。

自分自身の学習者時代のことを思い返すと、①の例としては、“be indifferent to～” が、前に憶えた “different” の干渉を受けて覚えられなかったこと、②の例としては、“distract” / “distraction” が、前に憶えた “destroy” / “destruction” のスペルと混ざってしまったことが挙げられる。

## 解決策

こうした問題を解決する手段としても、接頭辞、語根、接尾辞の分析が大いに役立つ。

反復練習を指示するだけではうまくいかない場合、以下のような理屈を説明すると、生徒の誤解が解決し、語彙が定着する可能性が高まる。ここでは、順向抑制[干渉]について、普段私が生徒に対して行っている説明を掲載してみたい。

“distract”の“dis”は「向こうに引っ張って、バラバラにする」イメージ、“tract”は「トラクター」と一緒に、「引っ張る、引き離す」ですね。したがって、“distract”は「気持ちを向こうに引き離す」つまり、「気を散らす」という意味になります。“distract”は“distract”に“ion”をつけて名詞になっています。だから、「気を散らすこと、気晴らし」です。一方、“destroy”は“de”が「分けて、下に」を表す接頭辞で、“stroy = structure”が「建物・建てる」を表します。したがって“destroy”は「建物を下に引っ張って、取り壊す」という意味になりますね。さらに言えば、distractとdestructionの発音の違い(a=æ, u=ʌ)からも両者の違いが分かります。

次に逆向抑制[干渉]について、“be indifferent to～”を例に説明しよう。こちらは、生徒の理解力に応じた、①感覚的な説明と、②より「正確」な説明の2つを挙げてみたい。

### ①感覚的な説明

洋服を買った後で、「また同じようなものばかり買って！」って言われたことはありませんか。確かに人の好みというものはあるから、他人から見たら、「同じよう」に見えるかもしれないけれども、「私は違うものを買ったんだ！」と思いませんか。そうです。「関心がない」人は「違う」“different”ことがわから「ない」“in”のです！

### ②より「正確」な説明

“different”の“dif”は発声の都合上、“dis”（分ける→向こうに）が変化したものです。“fer”が「運ぶ」という意味です。ですから、

“different”は「向こうに運ぶ」という意味がもとになっています。ですから、“be indifferent to～”は「向こうに気持ちを運ばない’。“in”（否定の接頭辞）、つまり「～に無関心である」という意味になります。

このような説明を随時用いることで、ただ丸暗記するのではなく、語彙の深い理解が可能となる場合がある。なにより、「なるほど！」と生徒に気付かせることで、勉強に対していやいややられているのではなく、自ら積極的に知ってこう、理解してこうという姿勢を育むことができる。英和辞典の大部分（中辞典以上）にこうした情報は載っているが、単語帳には必ずしも十分には載っておらず知らない生徒も多いので、情報過多にならないよう慎重な配慮をした上で、少しずつ、しかし多少の時間を費やして指導するべきだろう。わずかなきっかけで知識が統合され、丸暗記しようとするより、語彙力の上昇が見られる例が多々ある。“The shortest route can be the longest, and a long route may be the fastest.”（せいてはことを仕損じる、急がば回れ）である。

## 終わりに

受験指導では、文法、構文の習得などに重点が置かれる一方、語彙の習得に関しては、どうしても生徒の自主的な努力に任せることが多いのではないだろうか。しかし、生徒の側からすると、辞書や単語帳で単語を調べて暗記するプロセスが、英語学習の大半の時間を占めているのが実態であろう。生徒の学力や学習方法が多様であることから、特定の語彙学習法を画一的に導入するのは難しい。しかし、接頭辞等の知識をはじめ、上に述べたようなアドヴァイスをはじめとするあらゆる手段を適宜織り交ぜて、生徒の語彙習得への意欲向上と、記憶の妨げとなっている問題の解決を図る試みを持続的に続けることが大切である。また、はじめは記憶がなかなかうまくいかない生徒の場合も、反復練習を繰り返しているうちに記憶の容量と効率が急速に上昇するケースがきわめて多いから、不断のサポートと励ましを心がけたい。